

パステルナーク『ドクトル・ジヴァゴ』¹における未来の表象

梶山 祐治

はじめに

ボリス・パステルナークの長編小説『ドクトル・ジヴァゴ』（1955年完成、57年出版）について、作中を流れる時間の問題から本稿を始める。この小説の非・社会主義リアリズム的な側面についてはこれまでに様々な観点から言われてきたが、特異なのは作中の時間も同様である。ボリス・ガスパーロフは、パステルナークにおける音楽の重要性に着目して、『ドクトル・ジヴァゴ』には構成原理として対位法があることを論じた。² この作品は多種多様な主題を含んでおり、それら複数の独立した個々が音楽における対位法のごとく同時に組み合わせられることで、『ドクトル・ジヴァゴ』の全体を構成し、「時間の直線的な流れを克服」³ するのだとしている。対位法自体はガスパーロフが導入したきわめてユニークな概念であるものの、彼も認めているように、彼の考えとも近い立場にあるポリフォニーや時間あるいは説話構造の非直線性について、この作品に関して全く問題にされてこなかったわけではない。⁴ 例えば、主人公の母親の葬式から始まったこの小説のエピローグ最終章において母なるモスクワがヒロインに喩えられている点を指して、全体の円環構造を指摘することもできるだろう。また時間を直接考察対象としたものではないが、小説の構成全体に関わる解釈として、黙示録のモチーフ⁵ や歴史的側面⁶ についての先行研

¹ パステルナークの全テキストは、*Пастернак Б.Л. Полное собрание сочинений с приложениями: в одиннадцати томах. М. 2003-2005* を使用。本稿で全集と言う場合この版を指し、引用では Пол. собр. соч. と表記した。パステルナーク以外の外国語文献についても、本稿の翻訳は断りのない限り拙訳を用い、引用文中の……は省略を示す。『ドクトル・ジヴァゴ』に関しては以下の邦・英訳を参考にした：ボリス・パステルナーク（江川卓訳）『ドクトル・ジバゴ』新潮文庫、1989年；Boris Pasternak, *Doctor Zhivago*, Richard Pevear and Larissa Volokhonsky, trans. (London: Harvill Secker, 2010).

² *Гаспаров Б.М. Временной контрапункт как формообразующий принцип романа Пастернака «Доктор Живаго» // Литературные Лейтмотивы: Очерки русской литературы XX века. М. 1994.*

³ Там же. С. 244.

⁴ Там же. 一例としてガスパーロフは、以下の文献を挙げている：Krystyna Pomorska, *Themes and Variations in Pasternak's Poetics* (Lisse: The Peter de Ridder Press, 1975), pp. 74-75. その他にも、ロバート・バードは『ドクトル・ジヴァゴ』における過去と未来の間隔を焦点に、時間的な側面について独自の解釈を行っている：Robert Bird, "The Aesthetic Interval in Doctor Zhivago," in Lazar Fleishman ed., *The Life of Boris Pasternak's Doctor Zhivago* (Stanford: Berkeley Slavic Specialties, 2009).

⁵ ニーチェは、直線とは対照を成す円環的な時間の構造を含むその永劫回帰の思想によって、キリスト教の終末へ向かおうとする時間の流れを痛烈に批判したが（『ツァラトゥストラはこう言った』、『ドクトル・ジヴァゴ』に通底する黙示録のテーマはこの作品の直線的な時間の流れに関わっている。

究もある。

こうした作中を流れる時間の性質に基づく研究に連なるものとして、本稿では字義的に時間とも密接な関係にある未来の表象に注目した。全編を通してさまざまな登場人物によって呟かれる言葉「未来」は、ある時点での「現在」のその先への思いを反映し、コンテクスト上の意味の変わり行く過程は小説の基底にある直線的な時間と並行している。

本稿第1章で見ると、この作品の序盤には明るい未来への志向が明確に存在する。不幸な境遇下に置かれた主人公ユーラとラーラが呟く「未来」は、何か輝かしいものへの期待に満ちているが、主人公たちが抱いていた期待は彼らの成長と共に変質していき、未来は当初の期待通りにはいかないことが徐々に判明する（本稿第2章）。本稿は、初め主人公たちにとって期待を象徴するものとしてあった「未来」に込められたイメージの変遷を追っていく（強調しておきたいのは、「未来」はジヴァゴとラーラ二人のためにあるわけではなく全ての登場人物に共有されているのだが、主人公である彼らの比重が相対的に大きい、ということである）。本編はジヴァゴの死をもって幕が閉じられる。本来であれば、小説が直線的な完結性を備えるためには、序盤で期待されていた未来は最終部において提示されるはずであるが、予め未来の結末に言及しておくことで、主人公の死に象徴されるようにそれは期待されていた通りの幸福な様には実現しない。本稿第3章では、最初に期待されていた未来がどのように現出するのかを見届け、そのあり方を考える。

1. 未来への期待

初めに物語の始点において、言葉の意味としてその後の展開を促進する力を持つ語句「未来 будущее」をキーワードとして『ドクトル・ジヴァゴ』第1・2編を中心に整理する（以下本稿中の「未来」という単語は原則的に原文では будущее に対応していることとし、それ以外の語に対応する場合は注記する。また引用文では強調のため単語「未来」に下線

『ドクトル・ジヴァゴ』の黙示録モチーフについては、Mary F. Rowland and Paul Rowland, *Pasternak's "Doctor Zhivago"* (Carbondale: Southern Illinois University Press, 1968); Смирнов И.П. Порождение интертекста: элементы интертекстуального анализа с примерами из творчества Б.Л. Пастернака. СПб. 1995. СС. 170-172 を参照。前者は『ドクトル・ジヴァゴ』研究において先行研究として古典的な役割を果たしているが、ユングの理論を多用するなど全体的に学術的な厳密さに欠ける点がある。しかし研究が進んだ現在の立場から見てもなお斬新な指摘を多く含んでおり、本稿では関連ある箇所では肯定的に言及するようにした。

⁶ 『ドクトル・ジヴァゴ』はしばしばレフ・トルストイ『戦争と平和』としばしば比較され、例えば歴史観についてニコラ・キアロモンテは、トルストイの平和と戦争に対応するものがパステルナークにとっては世界の両側面である自然と歴史なのだとし、両者の違いを論じた。Nicola Chiaromonte, "Pasternak, Nature, and History," *The Paradox of History: Stendhal, Tolstoy, Pasternak, and Others* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1985), p. 123.

を引く)。主人公のユーリー・ジヴァゴの意識は、現在ではなく未来に向かっており、未来への志向が強調されている。物語の冒頭、「少年は、母の墓の上で言葉を発しようとしているように思われた」⁷と記されていることは、登場人物としての方向性を決定付けている。後に詩人として言葉を紡ぐことになるジヴァゴの未来が、すでに予言されているからである。そしてすぐさま、実際にこの少年の意識は未来へ向いていることが示される。叔父に連れられ馬車に揺られながら、父も母も失った寄る辺ない少年の心情は、「未来について思いを馳せ、考えたかった」⁸といった一文によって描写される。第1編において、力を持たない少年は現実を変えるほどの力を持たず、未来を憧れることしかできない。この小説の主人公でありながらユーラはまだ子どもであり、ここでの主人公の描写は彼の無力さを表現することに費やされている。具体的には、この少年はしばしば涙に暮れる様子が描かれ、寂しさのあまり気を失いさえするのである。

第2編は「別世界の少女」とタイトルで表されているように、ラーラが主人公格で扱われている。ユーラが未来を望んでいた一方で、別世界のこのヒロインもまた同様に未来に憧れている。両者ともに、現在に何かしらの不満を覚え、将来に希望を託さざるを得ないという点が共通している。惰眠を貪ることの許された休日の早朝、早めに目覚めたラーラは寝床の中であって自らの身体を次のように規定する。

寝床にある自分の背丈と姿勢を、ラーラはいま二つの点、すなわち、左肩の突起と右足の親指によって感じ取っていた。肩と右足以外の残りすべては、程度の差こそあれ彼女自身、彼女の精神あるいは本質なのであり、それらが体裁良く身体の輪郭に収まって、ひたすら未来に焦がれているのだ。⁹

彼女の身体はまだ16歳だが、周囲からは実年齢より大人に見られている。その成熟の早い身体が、最近では母の愛人であるコマロフスキーの、好色家としての視線の対象になりつつあった。ラーラはその気配を敏感に感じ取り、同時に自らの身体に対しても意識的になっていることが上の引用部分につながっている。恵まれた同世代とは違って生活の苦勞で鍛えられた彼女の身体は、未来に焦がれる思いが充満していたのだ。この引用部分の前章には、大人であるラーラの母の、未来に対する態度が描かれている：「アマリヤ・カルローヴナは未来について深く考えるのを恐れていた¹⁰」。コマロフスキーの情婦である母が革命のさなか未来を期待せず（できず）にいるこの状況は、続いて描写されるラー

⁷ Пол. соб. соч. Т. 4. С. 6.

⁸ Там же. С. 10.

⁹ Там же. С. 27.

¹⁰ Там же. С. 25.

ラが「未来に焦がれている」姿と対照を成すことで、未来を待望する子供と未来に期待できない大人という二項対立を形成している。

第2編ではラーラの母が自殺騒ぎを起こし、ユーラとラーラが最初の邂逅を果たす。だがこれはラーラの側では気付かないユーラ側の一方的なもので、二人の運命はまだ交わらない。少年はずっと後に激しく愛し合うことになるこの少女を今は傍らで見守ることしかできず、その様子は、第2編最終章において克明に描かれる。すでに関係を結んでしまったラーラとコマロフスキーの眼差しの交感を、ユーラは暗がりの中から覗き見て打ちのめされる。理由は、「奴隷となった少女の姿は、測り知れない神秘であると同時に、躊躇もなく明け透けにされたものだった」¹¹ からである。ユーラが別世界の少女から受けた衝撃は、これまで所属していた世界を無効にするほど強烈であった：「……彼らの子供っぽい哲学はどこかに消し飛んで、今ユーラはどうすべきかわからなかった」。¹² 友人のミーシャは、ユーラにその中年男が彼の父親を破滅させた張本人であることを告げるが、全く聞く耳を持たない。なぜならその瞬間、「ユーラが考えていたのは少女と未来のことであり、父と過去のことではなかった」¹³ のだ。父親が過去に属するものであることがさり気なく示されており、¹⁴ 少女は淡い期待と共に未来のものとしてある。ユーラが彼女を理解するため、別世界でなく同じ世界の住人となるためには、彼自身が成熟する未来を俟つかないものである。

上記で確認した未来への志向は、今後の物語へのつながりを速やかに用意しようとしている点で、直線的な時間を保証しているといえるだろう。ここまで引用した例は、第1・2編におけるまだ成人していないジヴァゴのものである。この幼少年時代と関連する重要な情報として、『ドクトル・ジヴァゴ』に付けられた最初のタイトルが、「少年少女たち Мальчики и девочки」であったことを指摘しておきたい。46年10月13日、オリガ・フレイデンベルクに宛てた手紙でパステルナークは、「小説のタイトルは今のところ『少年少女たち』です」¹⁵ と暫定的な表題を明らかにしている。間もなくこのタイトルは変更され、様々な呼び名が与えられた後、48年春、第3編「スヴェンチツキー家のヨールカ祭」を

¹¹ Там же. С. 62-63.

¹² Там же. С. 63. 鉛筆稿（いわゆる草稿）ではこの文章の後に以下の文が続いていた：「言葉では言い表せないが、ユーラは、自分の未来はここにいる少女と男性と結びついており、すでにこの夜から未来は有無を言わず始まったことを感じ取った」（Там же. С. 667-668）。

¹³ Там же. С. 63.

¹⁴ ここでは父が否定的なものとして過去と共に少女・未来と対置されているが、パステルナークの作品において父親が蔑ろにされた存在であることを考えると、この構図の意図が分かりやすい。パステルナーク作品における存在感の小さい父親像については、拙稿「パステルナークの作品における稀薄な父親像」『SLAVISTIKA』第25号、2009年を参照。

¹⁵ Пол. собр. соч. Т. 9. С. 472. 邦訳は以下を参考にした：ボリス・パステルナーク、オリガ・フレイデンベルク（江川卓、大西祥子訳）『愛と詩の手紙』時事通信社、1987年。

執筆し終えた後で『ドクトル・ジヴァゴ』と呼ばれるようになる。¹⁶ 物語の内容が修正されたわけではなく、このタイミングで全体のタイトルが確定したのである。

この作業から分かることを整理する。まず、『少年少女たち』によって書き始められた物語の内容がそのタイトルが当初指示していたものとかけ離れていったということが考えられる。『少年少女たち』の題の下に執筆された第1・2編は、そのタイトルによって示されるように子どもが前景化した内容であった。第1・2編で幸福な前途の象徴として用いられていた未来という語はその後、次章で見るように叙述で使用される度肯定的なニュアンスを失っていく。なぜなら、第3編ではそれ以前で少年少女として描かれていた登場人物たちが大人への移行に差しかかり、以後彼らは激しく動く歴史の中に放り込まれるからである。編題にあるヨールカとは、本来少年少女が祝福される祭である。聖なる家（y Сувентицких）での通過儀礼としてのヨールカを経ることで、彼らは子供の時分に期待していた未来を迎えることになる。

また、第1編の分析箇所でユーラは無力な存在として描写されている点を指摘したが、第3編では、母を思い出して涙に暮れていた当時の自分を回想する箇所がある：「あのときの主役は彼ではなかった。……あのとき主役だったのは、彼の周囲、外部にあるものだった」。¹⁷ これは逆に、上の引用部分の発話時点において主役が彼になったことを示している。そして第1編で無力だったユーラは、「差し迫る運命」の編題を持つ第4編からドクトル・ジヴァゴと呼ばれるようになる：「以前はユーラと呼ばれていたが、近頃ますますユーリー・アンドレーヴィチと名と父称で呼ばれることの多くなってきたドクトル・ジヴァゴは……」。¹⁸ 物語は序盤2編の牧歌的とも形容することのできる幼少年時代のプロローグ部分、第3編の大人への移行期を経て、革命の起こる第4編からジヴァゴを主人公として進んでいく。第3編執筆終了後というタイミングで表題の次元で子どもが大人に変わったという事実は、物語の中身においても主人公の立場が変わったことと密接に結びついているのである。

2. 変質する未来

時間が流れるにつれて未来がかつて想像されていたものとは違うことが表面化してくるのは第6編からであるが、まずは過渡期と言える第4・5編において未来のイメージはどうなっているのかを見ていく。第4編は、過去と未来が混在する状態と位置付けること

¹⁶ Борисов В.М. Река, Распахнутая Настежь: К творческой истории романа Бориса Пастернака «Доктор Живаго» // Пастернак Б.Л. Доктор Живаго. М. 1989. С. 426.

¹⁷ Пол. собр. соч. Т. 4. С. 88.

¹⁸ Там же. С. 102. ここでドクトル・ジヴァゴの呼称が初めて登場する。

が可能である。熱病にかかったラーラは寢床に臥し、ウラルからモスクワにやって来た遠い過去の思い出を呼び覚まして自らを慰めるが、窓外は暖かい南風が吹いて来たる春（будущая весна）¹⁹の予兆に満ちており、未来と過去とが窓を隔てて対照を成している。²⁰ やがて健康を取り戻したラーラはパーシャとついに結ばれる。結婚式で参列者から将来の裕福な暮らし（будущее богатство）²¹を願われる一方で、彼女自身はすでに自分の将来（будущность）²²を夫に捧げるつもりでいる。ジヴァゴの方は、友人たちが本人に無断で出版した著作が賞讃され、文学者としての将来性（будущность）²³に大きな期待が寄せられていた。しかしそうした前途を覆す契機が発生する。第4編の最後の一行で2月革命が勃発するのである。

それゆえ第5編は「過去との別れ」と名付けられるのであり、幼少年時代は過去のものとして遠ざかって行き、ジヴァゴたちは歴史の当事者として運命を引き受ける。主人公たちの思い描いていた未来が徐々に現実となりつつあり、以後、未来は期待の地平としての役割を緩やかに失っていく。次の引用は第5編、ジヴァゴがラーラに語って聞かせる台詞でペテルブルクでの蜂起から間もないものだが、「今」の悦ばしい気持ちが表現されている。

まったく今はなんて時代なのでしょう！ ぼくたちが生きているこの時代は！ こんな途轍もない時代は、永遠の時においてもただの一度だけです。だって、全ロシアが屋根を吹き飛ばされて、ぼくたち全ナロードは開けっ広げな空の下に晒されているんですから。誰もぼくたちを覗き見はしない。自由なんです！ 本物の、言葉の上や要求されたものではなく、期待を超えて空から降ってきたものなんです。思いがけず、何かの行き違いで自由がやって来たんです。²⁴

この場面は医師として派遣された先でお互い結婚している状態のジヴァゴがヒロイン・ラーラに対してほとんど初めて内心を語る場面でもあるため、革命に対する悦びと彼女への賛歌が並行している。しかし純粋に肯定的な表現はこれが最後になり、妻の元へ帰ると同

¹⁹ Там же. С. 94.

²⁰ この場面は内側の過去、外側の未来を窓が境界として分け隔てているが、パステルナークの作品では窓が境界として重要な役割を果たすことが多い。パステルナークの作品における窓については以下を参照：Alexander Zholkovsky, “Window in the Poetic World of Boris Pasternak,” in *Themes and Texts: Toward a Poetics of Expressiveness* (Ithaca: Cornell University Press, 1984), pp. 135-153.

²¹ Пол. собр. соч. Т. 4. С. 97.

²² Там же. С. 98.

²³ Там же. С. 128.

²⁴ Там же. С. 145.

時に革命への期待はすぐさま修正される。

第6編では10月革命の高揚の中に矛盾した感情が湧き起こる。革命はその鮮烈なイメージによって讃えられる。ジヴァゴの叔父が、開始された市街戦を指して「これが歴史だ」²⁵と興奮して印象を語り、ジヴァゴ自身はソヴィエト権力樹立の報に接してその手際の良さを外科手術に喩える。しかしそれでも彼は、大きく膨張した未来に対して受け入れようとする態度と同時に恐怖を感じている。引用が前後するが、以下で引用する2例は先の叔父の台詞より前に述べられているものである。

……彼は生涯にわたって善を渴望し幸福への才能があったにもかかわらず、のしかかった不幸の感情や未来に対して自分が無力であることの自覚から逃れるためどこへ身を隠すべきか、わからなかった。²⁶

判決が下されたことから目を背けることは不可能だった。彼は自分も自分の周りの環境も運命を背負わされていると考えていた。試練が、ことによると破滅が差し迫っていたのだ。自分たちに残された日数が指折り数えられ目の前で露呈していた。……彼は未来という途方もなく巨大なものを前にしては自分がちっぽけな人間でしかないことを理解した怖れ、その未来に愛情を寄せ秘密裏に誇りにしてもいた。²⁷

この2例と第6編より前の引用とを比べてみれば、主人公の未来に対する態度が変更されたことは明らかである。第6編より前に、この二つの引用例と同様未来が否定的なイメージとして登場する文章は、ラーラの母アマリヤの未来への不安を除いてひとつも存在しない。この第6編での未来に込められた意味は、ジヴァゴ自身破滅が身に迫っていることを感じていることから分かるように、不吉な予感であり終末の感覚である。前者の引用では恐怖を感じ、後者では恐怖を感じると同時に愛情も抱くという、未来の複雑なあり方が露顕している。²⁸

その後、ジヴァゴ一家が難を逃れてモスクワから遠く離れたヴァルイキノへ疎開する準

²⁵ Там же. С. 188.

²⁶ Там же. С. 181. この引用箇所と同じ第6編4章には、ジヴァゴが、「ロシアは世界で最初の社会主義の王国となることが運命づけられていると思います」（Там же. С. 180）というユートピア志向も垣間見られ、主人公の未来への錯綜した態度が顕著である。

²⁷ Там же. С. 182.

²⁸ ローランド夫妻は、第6編に過去への執着と未来への前進が同時に存在していることを論じている。具体的には2度登場する別個の壊れた時計は優れて時間の隠喩となっており、一方は停止することで過去への執着を、他方は壊れた後に突如動き出すことで未来への前進を意味している、という解釈である：Mary F. Rowland and Paul Rowland, *Pasternak's "Doctor Zhivago,"* pp. 100-101.

備をする第7・8編では、ジヴァゴたちは目の前の生活に専心し「未来」という単語は一切登場しない。一家に前を向く余裕はなく、彼らはただ目の前の難題から逃れようとする。ヴァルイキノでの生活が軌道に乗り出した第9編で、再び未来という言葉が登場する。生活がひとまず落ち着いた余裕から、ジヴァゴは日記を書き記すようになる。そのノートに、わずかに未来という単語が使われている箇所がある。妻トーニャが二人目の子を妊娠した確信を抱き、女性の神秘性について述べているところである：「彼女を支配しているのは、もはや彼女自身ではなく、彼女から生まれるはずの未来なのだ」。²⁹ この一文で未来は、希望の象徴として子どもとはほぼ同義で使われている。しかし、ここでの未来は注意して見なければならない。なぜならこの後ジヴァゴはパルチザンに拉致され家族と離れ離れになり、この「生まれるはずの未来」^{まみ}に見える機会は失われてしまうからである。後にジヴァゴは夢で家族と遭遇するが、その際この第2子については生まれたことさえ失念している。³⁰ この引用箇所は、ジヴァゴから未来がすり抜けていくことを準備する叙述と見做すことも可能である。そして、首都から遠く離れた閑静な田舎で思索に耽るジヴァゴは、先行きの怪しい革命の進展状況に疑義を呈すと共に、安易なユートピア志向に否定的な考えを抱き、³¹ こう日記に記している：「現在支配的な大仰な文句、未来（грядущее）の夜明け、新世界の建設、人類の灯といった広く流布した言葉……実際それらは才能不足による美辞麗句でしかない」。³² ノートに書かれたこの2例は、直接の非難ではないにしろ、未来に肯定的なイメージを与えるものではない。

この先、第10・11編で再び「未来」は登場せずに物語が進んで行く。続く第12編になって用例が一箇所見られるが、その意味するところはもはや完全に変質してしまっている。ジヴァゴが医者として部隊に参加しているパルチザンの中に、パンフィール・パルイフという妻子思いの兵士がいた。彼らの宿営地に、ヴィツィン軍に捕らわれ拷問によって片手片足を切断された兵士が、それらを背中にくくりつけられ地面を這い戻って来る。その兵士の背中には、武器を引き渡して降伏しなければパルチザン部隊全員に同じ処置を施す、

²⁹ Пол. собр. соч. Т. 4. С. 279.

³⁰ この場面の考察は、拙稿「パステルナークの作品における稀薄な父親像」、93-94, 99-100 頁を参照。

³¹ 『ドクトル・ジヴァゴ』をユートピア（ないしディストピア）文学の一種として読む試みはまだほとんどされていない。しかし一面ではソ連においてはきわめてイデオロギー的なものでもあった「未来」の表象が、ソ連が未来志向のイデオロギーから始まって、その後、時とともにそのユートピア的未来の実現不可能性が明らかになっていった過程と平行的に変質していくことを踏まえると、これらは合わせて考えなければいけない問題であり、これに関しては稿を改めて論じることにした。イーゴリ・スミルノフは間テクスト分析を中心としたその著書で、トマス・モア『ユートピア』、トマス・カンパネッラ『太陽の都』、オルダス・ハクスリー『素晴らしい新世界』ら代表的なユートピア文学を挙げながら『ドクトル・ジヴァゴ』の（反）ユートピア的側面を分析している：Смирнов И.П. Роман тайн «Доктор Живаго». М. 1996. С. 86-128.

³² Пол. собр. соч. Т. 4. С. 284.

という板きれが添えられていた。これを目にしたパルイフは、愛する家族が捕まるのを怖れる余り、妻子を惨殺しその結果発狂してしまう：「彼らを未来の苦しみから救い、自分自身の苦しみも削減するために、彼は憂えるあまり狂乱して、子どもたちに手をかけて殺してしまったのだった」。³³ 未来に待っているのは苦しみでしかない。

第 13 編でも、相手を理解していることの喜びからジヴァゴとラーラはお互いの思いを打ち明け合う。ラーラがジヴァゴに向かって、自分たちをアダムとイヴに準えている場面は、『ドクトル・ジヴァゴ』全体の流れを把握する上でも重要である。

あなたと私はいま、初めての二人の人間、世界の原初に何も身体を隠すものを持たなかったアダムとイヴさながら、終末の時に着るものも家も持たずにいるわ。私たちは、現在にいたるまで数千年のうちに世界であった、数え切れないほどのあらゆる偉大なものの最後の思い出なの。そうした消えてしまった奇跡の形見として、私たちは息をして、愛し、涙を流し、お互い支え合い、お互いしがみついているのよ。³⁴

現在が世界の終末に喩えられていると同時に、未来が目前に迫っていることがラーラの口から明らかにされている。「未来」という言葉は使われてはいないが、過去の終わりという感覚が強く打ち出されており、二人の前にはもう未来しかない、というわけである。以後に続く想定されるのは創世記の時間、すなわち新たに創造される世界である。

また第 13 編では、一箇所のみ「未来」の使用例がある。そこでは現在（＝過去の視点から見た未来）の状況が慨嘆され、当時前途が明るく思われた未来はすでに蝕まれていたことが明らかにされる。ラーラは戦争が今の全ての災いの源であるとジヴァゴに訴える：「そのときロシアの大地に偽りがやって来たのよ。一番の不幸、未来の悪の根源となったのは、個人の意見に対する信頼が喪われてしまったことだわ」。³⁵ すでに現出しかけている未来は間違って方向付けられていたことが遡及的に指摘されている。

本章の最後に、第 14 編における未来のイメージを確認する。ラーラを連れ出すため、ジヴァゴたちの元にコマロフスキーがやって来る（コマロフスキーが訪問して来る前には、狼の吠え声が不吉な予兆として繰り返されている）。コマロフスキーを頑なに拒否するジヴァゴに対し、ブラック・リストに記載されていることを理由に、この地から立ち去ることを説得しようとする。今さえ乗り切れば、近い将来に平安が訪れると言うのである：「上層部は大きな改革を準備中です。……もっと民主的な路線に変更して、一般的な法秩序を

³³ Там же. С. 367.

³⁴ Там же. С. 400.

³⁵ Там же. С. 401.

認めようというんです。それもごく近い未来のうちにですよ」。³⁶ 当然のごとく反発するジヴァゴを気にもとめずコマロフスキーは彼らの家に居座り、さらに彼の専門であるらしいシベリア方面に話を持って行き、輝かしい未来のイメージを呈示していく。

シベリアは、もっとも豊かになる可能性を秘めていると言われている、実は新しいアメリカなのです。これは偉大なるロシアの未来の揺り籠、私たちの民主化と繁栄と政治的な健全化の担保ですよ。しかし、それにもまして魅力的な可能性を秘めているのが未来のモンゴル、わが偉大な極東の隣国こと外モンゴルですな。³⁷

本作でそうした未来はこの先全く描かれることはない。つまりコマロフスキーがジヴァゴに提示したのは偽物の未来であり、未来の虚偽のイメージなのだ。本章では前章で期待と共にあった未来が変質する様を見てきたが、それは段々と期待を失い、否定的なイメージを付与され、ここでは敵対する人間によって虚偽のイメージとして呈示されている。未来への期待が大きいほど、それが裏切られたときの失望による落差の振幅は大きくなる。未来は全く希望を失ってしまったのだ。

3. 到来する未来

ここまで、物語の序盤から終盤にかけての「未来」に付与されたイメージについて見てきた。『ドクトル・ジヴァゴ』は、第15編「最終編」に主人公が死ぬことによって、物語の節目を迎える。その編題が端的に示しているように、第15編はジヴァゴの物語の終わりであり、ジヴァゴの死後に続く第16編「エピローグ」、第17編「ユーリー・ジヴァゴの詩集」は、彼の物語を補完するものである。

「最終編」において、ジヴァゴは家族や友人たちの前から姿を消し、弟エヴグラフの援助を受け、侍従^{カメルゲルスキー}横町の部屋で誰にも知られることなく「自分の運命を立て直すため」³⁸ 執筆に専念する。ある日、ジヴァゴは病院へ出勤するために乗った路面電車で息苦しさを覚え倒れると、そのまま帰らぬ人となってしまう。彼が運び込まれた最後の住居には訪問客が跡を絶たず訪れ、そこへ、近くを通りかかったためにかつてパーシャが借りていた部屋を覗こうとしたラーラが偶然やって来る。ラーラが人生で愛した二人は同じ部屋に住んでいたのである。偶然はこれだけに留まらず、その部屋でかつてパーシャとラーラが蟬

³⁶ Там же. С. 419.

³⁷ Там же. С. 421. この引用部分には、ブロークのシベリアを詠った詩「新しきアメリカ」との間テクスト性が指摘されている。Смирнов. Роман тайн «Доктор Живаго». С. 101.

³⁸ Пол. собр. соч. Т. 4. С. 483.

燭の灯りの下結婚について話し合っていた際、その灯りを往来からジヴァゴは眺め蠟燭について思いを巡らしていたのだった。ジヴァゴもラーラもそうした偶然のことなどつゆ知らず、彼はパーシャが住んでいたのと同じ部屋で執筆し、いまその部屋に死んで運び込まれた傍に、彼女は佇んでいる。³⁹ ラーラはジヴァゴの傍らで、哀しみと孤独で気が遠くなるのを我慢するうちに、幻想的な思いに捕われる。

心臓が張り裂けそうで、頭がずきずきした。うなだれて、彼女は憶測や思慮や思い出に埋もれていった。それらに没頭し沈み込むうちに、まるで一時的に数時間の間、彼女は自分がまだそこまで生き永らえるか分からない、未来のある年齢に移動してしまったかのようだった。そこでは彼女は数十歳も年老いて、すでに老婆になっていた。⁴⁰

主人公が死に、ヒロインであったラーラ自身もはや若くはない年齢に達したいま、現在の事実として現れた未来は空しさを意味しかねない。冒頭から保持されてきた（中盤からは保持しようと登場人物たちが努めてきた）未来への肯定的な思いは、主人公の冷たく横たわった体を前にしては、挫折したと見做さざるを得ないだろう。

この作品の主人公ジヴァゴが亡くなるのが 1929 年であることは作中に明示されており（「1929 年の初夏は暑かった」⁴¹）、この年号が五カ年計画の最初期と一致することから、ジヴァゴの死が持つ象徴的な意味については出版後間もない頃から様々な憶測を招いてきた。⁴² これに関して、11 巻全集を初めパステルナークに関する数多くの著作の編著者

³⁹ 『ドクトル・ジヴァゴ』におけるこうした運命的に一致する符号については様々な角度から度々論じられており、一例として、Смирнов. Роман тайн «Доктор Живаго». С. 123-124. また、このテーマに的を絞った論考としては次のものがある：Gleb Struve, “The Hippodrome of Life: The Problem of Coincidences in *Doctor Zhivago*,” *Books Abroad: an international literary quarterly* 44 (1970), pp. 231-236.

⁴⁰ Пол. собр. соч. Т. 4. С. 495-496.

⁴¹ Там же. С. 477. なお、スミルノフはジヴァゴが 1892 年生まれであることを算出し、享年がプーシキン、マヤコフスキー（さらにはラファエロ）と同じ 37 歳になることを指摘している：Смирнов. Роман тайн «Доктор Живаго». С. 81. 親しい友人ドゥドロフやラーラが 1890 年生まれであることを考えると、ジヴァゴが 1892 年生まれとされていることは明らかに作作的であり、ここには詩人の死という悲劇的なモチーフが埋め込まれていると断定できるだろう。ドゥドロフの年齢については、スミルノフの説明を参照（Там же.）。ラーラの年齢は、「日本との戦争はまだ終わっていないかった」（Пол. собр. соч. Т. 4. С. 23）時点で、「彼女は 16 歳を少し越えたばかりで……」（Там же. С. 26）あることから類推できる。

⁴² 例えば 20 世紀イタリア文学を代表する作家のイタロ・カルヴィーノはすでに、1958 年 6 月に雑誌「過去と現在」誌 6 号において、以下のように述べている：「パステルナークがジバゴの生涯を 1929 年で終わらせたのが意図的であったのかどうか、そして——いま現在までつづく物語を書き始めて、この時点で彼が言いたいと思っていたことを書きつくしてしまったのに気付いたのか、それを知ることは重要である」（Italo Calvino, “PASTERNAK E LA RIVOLUZIONE,” *Passato e presente* 3 (1958), p. 373; 引用は、イタロ・カルヴィーノ（須賀敦子訳）『なぜ古典を読むのか』みすず書房、

である息子のエヴゲーニーは、「ロシア新聞」のインタビューで、「もしジヴァゴが 1929 年以降も生き永らえたらどうなっていたか」との端的な質問を受け、次のように答えている：「私にそんなことは予見できません。なぜなら父は、主人公が留まり得る精神的雰囲気が終わりを迎えるのが、集団化の始まる 1929 年と考えていたからです。父はそもそもの初めから、主人公の一生を国内戦の期間、革命、そして革命後の時期から集団化、すなわち全体主義テロルの始まりまでとすることを決めていました」。⁴³ こうした見方は、この年号に対するその後の解釈として定着し他の研究者も踏襲しているが、⁴⁴ エヴゲーニーのいうパステルナークの歴史観に従って「未来」のあり方を考えるならば、本作品序盤で見られたような明るい未来への期待が持てたのは 1929 年までであった、ということになる。

ところが、エピローグの最終章においてもまだ未来は言及される。ジヴァゴともっとも親しい友人であったゴルドンとドウドロフが、ジヴァゴの生前は出版され得なかったノートを手し、小高い丘から眼下に広がるモスクワを見下ろしているシーンである。

モスクワは今やこの夕べ、そうした出来事の舞台ではなく手にノートを携えた彼らが終わりへと近づきつつある、長い物語の主人公そのもののように思われた。戦後に待ち望まれた光明や解放は、考えられていた様に勝利と共に訪れなかったが、しかしそれでも自由の予感は戦後の間ずっと雰囲気として漂い、ただ一つの歴史的内容を成していた。窓辺に佇む年老いた友人たちには、この精神の自由が訪れ、まさにこの夕べ未来は路上眼下に感じられるようにあり、そして彼ら自身がこの未来の中に足を踏み入れ、今後もその中にあるのだと思われた。⁴⁵

物語序盤で明るい前途の象徴として用いられていた「未来」は、その後革命の勃発、国内戦さらに戦争と、ロシアが直面した危機の歴史にあって、希望そのものが揺らいでいき、

1997 年, 229 頁)。当時のイタリアでの『ドクトル・ジヴァゴ』受容については、*Гардзонио С. 1958-й год — год Пастернака // Флейшман Л. (ред.) В Кругу Живаго: Пастернаковский Сборник, Станфорд. 2000* で詳述されている。

⁴³ *Пастернак Е.Б. “Доктор Живаго” в 45 лет — Сын Пастернака раскрывает подробности появления на свет романа* [http://www.rg.ru/Anons/arc_2002/1025/3.shtml] (2011 年 12 月 19 日閲覧)。

⁴⁴ 梶山郁夫はスターリンとの関係から「1929 年にパステルナークは、スターリンへの愛という忌むべき呪いによって、内なるジヴァゴを、あるいは彼がのちにロシア的とみなした精神性を喪失した」(梶山郁夫『熱狂とユーフォリア』平凡社、2003 年、197 頁)と結論し、ボリス・ソコロフは、「まさにこの年に小説の主人公は、革命前のインテリゲンツィアの死を象徴せんがため滅びなければならなかった。その象徴される死とは、必ずしも肉体的なものとは限らず、何よりもまず精神的な死であった。なぜなら生き永らえるため、共産主義イデオロギーの下順応することを強いられたからである」(*Соколов Б.В. Кто вы, Доктор Живаго? М. 2006. С. 14*)と指摘している。

⁴⁵ *Пол. собр. соч. Т. 4. С. 514.*

途中から未来は暗い側面でしか言及されなくなってしまった。ラーラの死も第 15 編の最後で仄めかされており、結局明るい未来が訪れないままに主役の二人は死ぬ。

ここで再び作中の時代に注目したい。エピローグは 1943 年夏から始まるが、最終章はそれから「5 年あるいは 10 年が過ぎた」⁴⁶ 夏の一場面とまでしか記されていない。時期が曖昧にされてはいるものの、これは作者が執筆していた 40 年代初めから 55 年に完全に重なる。つまり、「未来の中に足を踏み入れ」たはずの作者にとっての現在においてさえ、なお未来に言及されるのである。時代が一致することで、テキスト中の「未来」が含む期待は作者の未来への思いも反映する。「戦後に待ち望まれた光明や解放」が考えられていたようには訪れなかったこと、自由は予感に過ぎず「精神の自由」がまだ訪れないことは、作者の、現実としてある歴史への不満でもある。スターリン時代作品発表の機会を奪われていたパステルナークにとって、精神の自由とは芸術家としての自由に他ならない。⁴⁷ テキストの初めから一貫して使用されることで直線性を保証していた言葉「未来」は、エピローグにおいても使用され、かつ作者にとっての現在まで時代を下ることで、言葉の内に含んでいた期待を先延ばしにすると同時に、作中の登場人物が抱く希望とパステルナークの願望という二重の意味を体現しているのである。

おわりに

『ドクトル・ジヴァゴ』の登場人物たちは、主人公にしても、周囲の人間に何らかの影響を与えることなく、自足的な存在として振舞う。人物同士が交わるときでさえ、そこに自発的な意思はなく、彼らは配剤された運命のレール上をなぞっていくかのようなのである。

⁴⁸ これは『ドクトル・ジヴァゴ』に限らずパステルナークの様々な作品について度々指摘

⁴⁶ Там же.

⁴⁷ エピローグで垣間見られた不満は、遺作『盲目の美女』（59～60 年執筆、未完）へと至る創作史を見る上で特に重要である。『ドクトル・ジヴァゴ』で描かれるはずであったのは、理解のあるパトロンに保護された芸術共同体であり、それは芸術が実現されるための場を希求していたパステルナークにとって理想的な状況であった。パステルナークは、エピローグで滞留していた芸術にとっての自由の期待を、『盲目の美女』で実現させようとした。エピローグ最終部分に木霊している未来への期待は、パステルナークがもっとも拠り所としていた芸術を通して、次の、そして最後の作品『盲目の美女』へと繋がることになる。『盲目の美女』のこうした解釈については、拙稿「未完の『天国篇』—パステルナーク『盲目の美女』—」『SLAVISTIKA』第 25 号、2010 年を参照。また、『ドクトル・ジヴァゴ』序盤に登場する芸術界のパトロンとされているコログリーヴォフの人物造形は、20 世紀初頭という時代的一致から、画家マティスのパトロンでもあった実業家シチューキンモデルとした、『盲目の美女』のブローホルとの関連で理解できるかもしれない。ブローホルの造形については以下を参照：Olga Andreyev Carlisle, *Voices in the Snow: Encounters with Russian Writers* (London: Weidenfeld & Nicolson, 1962), p. 208.

⁴⁸ 分かりやすい一例として、死んだジヴァゴの傍らで涙を流すラーラについての、以下の記述を参照。小説の主題のひとつであるジヴァゴとラーラの愛さえ、彼らの意思によるものではない：「二人

されてきたことであり、ミシェル・オクチュリエが『物語』（29年）と『スペクトルスキー』（30年完成、31年発表）を同時に論じた文章の中で両者に共通する特徴として挙げた、「真のプロットの欠如……出来事は因果関係でなく隣接関係によって結びついている」⁴⁹との説明がもっとも簡潔かつ適切に言い当てているだろう。⁵⁰ クリスチーナ・ポモルスカは、『ドクトル・ジヴァゴ』の登場人物に対して優位的に働いている原理を指して「決定論」⁵¹と呼んだ。登場人物を律するこの決定論に注意を払って『ドクトル・ジヴァゴ』全体を見渡せば、その支配から完全に免れている箇所が目にと留まる。エピローグの後、小説の掉尾を飾っている第17編「ユーリー・ジヴァゴの詩集」である。⁵² ジヴァゴが死んだ後にも彼の作品が存在し続けることは、パステルナークの芸術上の信条がもっともよく明文化されている「シンボリズムと不死」（1913年）を参照するならば、死からの象徴的な復活の実現である：「それにたとえ芸術家が、当然皆と同じように死んだとしても、彼が経験した存在の幸福は減びず、彼の原初的知覚の個人的・血縁的形態への接近は、彼の死後一世紀が経とうが彼の作品を通じて経験することが可能なのだ」。⁵³ この理念は、忍び

が互いに愛し合ったのは、俗に言われるように、「情熱に身を焦がした」がため、避けようがなかったからなのではなかった。二人がお互い愛し合ったのは、彼らを取り巻くものすべてが——彼らの足下にある大地、頭上の空、雲や樹々がそう望んだからだだった。彼らの愛は、彼ら自身よりも、おそらく周囲のものにいつそう気に入られていたのだった」（Пол. собр. соч. Т. 4. С. 497）。

⁴⁹ Michel Aucouturier, “The Metonymous Hero or the Beginnings of Pasternak the Novelist,” in Victor Erlich edit. *Pasternak: A Collection of Critical Essays* (Englewood Cliffs: Prentice-Hall, Inc., 1978), p.46.

⁵⁰ すなわち隣接関係とは換喩法に基づくものであるが、パステルナーク作品の隣接関係については、ロマーン・ヤーコブソン（山本富啓訳）「詩人 Pasternak に関する覚書」川本茂雄編『ロマーン・ヤーコブソン選集』大修館書店、第3巻、1985年、55-56頁；Гинзбург Л. О Лирике. М. 1974. С.349を参照。

⁵¹ Pomorska, *Themes and Variations in Pasternak's Poetics*, p. 76.

⁵² 第17編はエピローグの後にあり、「ジヴァゴの物語」という説話的観点からは若干ずれるため本論では詳しく分析しなかったが、登場する「未来」は以下の3例ある：「18 降誕祭の星」第10連「やがて未来（грядущее）の時が奇妙な幻となって／その後に訪れたものすべてが彼方に立ち現れた／幾世紀もの思考のすべてが、あらゆる夢が、あらゆる世界が／あらゆる未来の画廊と博物館が、…」（Пол. собр. соч. Т. 4. С. 538.）；「24 マグダラのマリア II」第4連「未来が仔細に見えます／あたかもあなたが時を止めたかのように」（Там же. С. 546）。第17編は全体としてジヴァゴの死後の世界を前提としているが、これらの例には預言（予言）としての響きが感じられる。シニャフスキーは、第17編の最後の詩「25 ゲッセマネの園」最終連（すなわち『ドクトル・ジヴァゴ』の最終ページでもある）の復活の場面を引用して、この小説が20世紀前半を舞台としながらも、過去を振り返るものではなく、未来への架け橋として機能していることを指摘しており（Синяевский А. Некоторые аспекты поздней прозы Пастернака // Lazar Fleishman ed., *Boris Pasternak and His Times: Selected Papers from the Second International Symposium on Pasternak* (Stanford: Berkeley Slavic Specialties, 1989), p. 362), これは本稿の主張とも一致する。

⁵³ Пол. собр. соч. Т. 3. С. 319. 1913年にシンボリスト系の出版社「ムサゲート」社主催行われたこの報告は大部分が失われてしまっており、引用は自伝『人々と状況』（57年完成）での本人による回想部分である。邦訳は以下を参考にした：草鹿外吉訳『パステルナーク自伝：自伝的記録・人びとと状態』虎見書房、1969年、65頁。「シンボリズムと不死」の現存するオリジナルは、Пол. собр. соч.

寄る死の影に怯える義母アンナ夫人に向かって語る、ジヴァゴの不死についての考えに継承されている。

一体あなたとは何なのでしょう？ ……あなたはご自身をどのように覚えておられますか、ご自分のどの部分を意識してこられましたか？ 腎臓ですか、肝臓ですか、血管ですか？ いや、どんなに記憶を辿ってみても、あなたはいつも外的な部分、行動した結果のうちにいたでしょう。あなたが手で編み出したものだから、家族、他者の中にです。さあ、ここからが肝心ですよ。他者の心の中にいる人間こそ、その人の精神なのです。それこそがあなたであり、あなたの意識は一生の間に呼吸し、糧とし、悦びとしてきたんです。 ……やがてそれらが記憶と呼ばれることになっても、あなたにどんな違いがあるのでしょうか？ それは未来の中に組み込まれたあなたなんです。⁵⁴

『ドクトル・ジヴァゴ』の1行目、母の葬儀で「永遠の記憶」⁵⁵ がうたわれるのは、不死のテーマを宣言するためである。そして「生あるもの」の名を持つ主人公が不死を体現するため、死後に残った彼の詩はエピローグの後に置かれ、「芸術は不死」の理念によって決定論を乗り越える。同時にジヴァゴの詩集は、第15編のジヴァゴの死、第16編の物語の終わりも超えてしまう。芸術は時間の流れを超えて存在する。

Образ «будущего» в «Докторе Живаго» Б. Л. Пастернака

КАДЗИЯМА Юдзи

Данная статья посвящена анализу образа слова «будущее» в романе «Доктор Живаго» Б. Л. Пастернака.

Т. 5. С. 318-319.

⁵⁴ Там же. Т. 4. С. 69.

⁵⁵ Там же. С. 6.

Слово «будущее» играет роль пружины, дающей толчок к дальнейшему развитию. В «Докторе Живаго» от начала до конца последовательно упоминается это слово, и его образ отражает идеи героев — Живаго и Лары. В самом начале романа образ «будущего» символизирует позитивные идеи и во многом означает надежду на светлое будущее, однако эта надежда постепенно утрачивается, и осознается тот факт, что счастливое будущее невозможно. Так, образ «будущего» начинает вызывать тревогу. Во второй половине романа образ «будущего» совершенно теряет привлекательность и символизирует негативные идеи, например, разочарование. Таким образом, в тексте романа это слово отражает разные идеи, и его последовательное употребление обеспечивает его линейность.

«Доктор Живаго» завершается смертью Живаго. Естественно ожидать, что будущее наступит в конце, чтобы ясное строение романа было выдержано. Однако слово «будущее» появляется даже в эпилоге, где Живаго уже не существует. Дело в том, что будущее не наступило, как ожидалось. Можно считать, что время эпилога соответствует времени, когда Пастернак писал «Доктора Живаго». Упоминание о будущем в заключении означает, что писатель не мог удовлетвориться настоящим и еще питал надежду на свое будущее. Тут же обнаруживается, что это не символический, а конкретный образ «будущего» автора, и рассуждение об образе «будущего» приводит нас к выводам о его взгляде на историю и искусство.